

国際会議報告

2022 中国伝統色彩学術年会への参加報告

Report of Participation in the 2022 Annual Academic Conference on Chinese Traditional Colors

國本 学史 慶應義塾大学, 黄冈師範学院
Norifumi Kunimoto Keio University, Huanggang Normal University

1. 2022 中国伝統色彩学術年会

筆者は、2022年11月18-19日、中国天津市で開催された、「2022 中国伝統色彩学術年会」に招聘されて参加した。本稿はその参加報告である。中国伝統色彩学術年会は、2016年より開催され、中国国内の研究者の他、これまでイギリス、フランス、韓国、香港、マカオ、台湾、日本等から研究者が招聘された。2018年以降は、日本との研究交流が重点的に行われている。筆者は2018年から継続して招聘され本年も参加した。2022年の中国伝統色彩学術年会は、研究と教育の有機的な結合が企図されている。天津美術学院が共同開催に名乗りを上げ、中国芸術研究院と天津美術学院の共同主催となった。開催地・会場は、天津市にある天津美術学院である。2016年から2021年の北京での開催は一区切りを迎え、参加者の論文をまとめた書籍が2022年3月に出版された。しかし、中国伝統色彩学術年会は本年も開催され、今後も継続しての開催が目指されている。

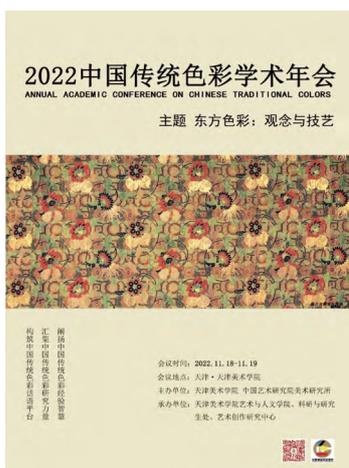


図1. 2022 中国伝統色彩学術年会 会議ポスター画像
画像は、中国伝統色彩学術年会事務局より提供

2. 日本からの参加研究者とその講演内容

招聘された日本の研究者は、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所副所長の早川泰弘氏、国立歴史民俗博物館准教授の島津美子氏、日本画家・東京藝術大学大学院教授の荒井経氏、慶應義塾大学非常勤講師・黄冈師範学院特聘教授の國本学史(筆者)の4名

である。学術年会は2日間に渡り、第1場から第8場までの各セッションが、おおよそ講演者3-4名と主講人(司会)、評議人(評価)1名ずつのセットで展開された。講演者は総勢31人を数えた。本年も4名の日本の研究者が招聘されているのは、日本の色彩研究についての注目の高さであると言える。本会における日本の研究者の講演を、講演順に要約する。早川泰弘氏は、装飾経にみられる金色の、金銀以外の真鍮の使用について、従来研究の16c頃だけではなく12-13c頃に遡る具体作例を示しつつ説明された。島津美子氏は、日本で用いられていた赤色系の色料が無機物・有機物ともにあることと、当該の使用例を示しつつ歴史の変遷をまとめられた。荒井経氏は、ピエト・モンドリアン(Piet Mondrian 1872-1944)の作品を日本画の絵具で表現する試みを通じて、東洋の色料が材質としての意味性を持つようになったことを指摘された。國本は、日本の色彩の近代化を、色彩論受容・色名変化・色彩教育という要素から読み解き、近代化=西洋化という図式では分析仕切れない、東アジアの中の日本の近代色彩の性質について提示した。



図2. 講演者の記念撮影時の様子

3. 学術年会のハイブリッド開催

2021年の中国伝統色彩学術年会では、開催時期に新型コロナウイルスの感染拡大が警戒され、全講演・視聴参加がオンラインで行われた。2022年は、開催直前に新型コロナウイルスの感染者数が増加し、天津美術学院からの講演者やスタッフ・学生は現地会場での参

加となったが、その他の講演者・参加者は、オンラインでの参加となった。準備期間にも新型コロナウイルス感染状況の悪化や、事務局体制の移行もあったために、開催自体が危ぶまれたことも後日判明している。開催地や事務局の変更という困難がありつつも無事に年会在開催されたことは、共同主催の両機関の努力と貢献が大きいと言える。動画配信のスタイルが昨年より変更となり、上記事情もあったためか、会議事務局はオンラインの視聴・登録者数等をカウントしていない。本年の参加者総数が不明なのは残念である。配信アプリである騰迅会議（外国語版ではVooV Meeting）によって、各講演はリアルタイム配信された。日本語から中国語への翻訳は、別アプリを用いた逐次通訳によって漸次訳される形ではなく、騰迅会議アプリケーション内で、同時通訳がなされた。



図3. 講演者に質問をする学生

4. 2022年度の中国伝統色彩学術年会のテーマと構成

本年の中国伝統色彩学術年会のテーマは、「東方色彩：観念と技術」であった。例年通り、講演者は厳密な研究テーマの限定は求められないが、それぞれの講演内容には、提示された色彩観念・技術に関わるテーマが明確に反映されていたと言って良い。

本年も、会議開催を祝して著名な大学・博物館所属の研究者たちからのコメントを記録した動画が放映された。会議の初めには、天津美術学院院長の賈広健氏が開会の辞を述べられ、中国芸術研究院国画院院長・中国伝統色彩学術年会発起人の牛克誠氏による挨拶も行われた。牛克誠氏は本会を、国際研究を含めた様々な色彩研究を繋げる場として意識されていることを述べられていた。今回は、大学がはじめて共同主催となったこともあり、教育の観点について強調されていたと言える。スケジュール通りの進行を遂行するために、学生からの質問に対して、後で講演者と直接の質疑とする、と司会からの指示が出されたセッションがあった。しかしその決定に対して、学術的な質疑は開かれた形であるべきであり、予定時間を越えても学生

からの質問とその返答がオープンになされるように牛克誠氏が求められて質疑応答が続けられたことは、研究の公平性の観点から適切である。

講演の特徴としては、30-40代の研究者の活躍が目立つ。例えば、清代服飾品の実物に即した継続的な研究は、服飾史における色彩研究の蓄積が感じられる。また、建築装飾の色彩研究は、文献・色材・復元等、複数の研究者の視点でそれぞれ報告が重ねられ、当該研究者達による共同研究の成果が目される。さらに、中国の研究者による日本のかさね色についての研究がなされる一方で、日本の研究者によって漢訳洋書と東アジアにおける色彩の近代化との関係性についての視点提示も行われた。こうした研究成果の相互検討からは、東アジアの色彩研究における、共通項・相違点を議論する意義や、研究上のシナジーが高まり、本会を通じて中国と日本の研究交流の成果が今後も実を結ぶことが期待される。



図4. 牛克誠氏による本会のまとめ

5. 中国伝統色彩学術年会の今後

中国伝統色彩学術年会は、2016年から通算して2022年で7年目の開催となる。名称通り、伝統的な色彩文化研究がある一方で、本年は色彩・美術教育に関わる研究講演も多く見られた。伝統色彩研究の成果を教育の場にどう反映させて行くかという観点は、社会還元として研究成果をデザイン・生活に反映させる試みと同様に、大切な視点であると言える。専門的な研究成果を教育に結びつけるべく、教育の場からのフィードバックを活かし、若い世代や学生の研究参加を通じて関心を深めて行くスタイルは、開かれた国際的な色彩研究の場と成果の活用方法として、望ましい姿であるとも言える。さらに美術史学、美術教育学、哲学、文化人類学、文化財科学等の多岐にわたる学問領域が、本会における色彩研究の成果発表を通じて統合的に活用され、他分野の研究領域に影響を与えることが期待される。研究成果が、次世代の研究資源として蓄積される機会が継続的に設けられる様子を、日本でも参考として行きたい。